法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

<特集論文>宮嶋資夫『坑夫』論

中村，真由美 / ナカムラ，マユミ

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
49
(開始ページ / Start Page)
53
(終了ページ / End Page)
61
(発行年 / Year)
1994-03-15
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019725

宮嶋資夫『坑夫』論

中村真由美

「プロレタリア文学」という言葉だけで、なぜかそれに該当する作品は敬遠されがちである。それは、作品の雰囲気が所謂「芸術的」でなかったり、「思想的」な面が多く描かれていて「文学的」ではないと思われているからだろうか。また「プロレタリア文学」が、労働者が不当な立場に追いやられ、低賃金で長時間酷使され、人間的な権利が奪われていた時代に存在していたからこそ持て囃されていたのであって、現在ではそうした状況がない以上、「プロレタリア文学」は読まれる必然性がないと考えられているのだろう。実際私も、この作品を読むまではそうした中の一人であった。だが『坑夫』を読んで考え方が変わった。「プロレタリア文学」と聞くと、善玉（労働者）対悪玉（資本家）といった、勧善懲悪的な単純な対立構造がすぐ思い浮かぶ。しかしこの作品には、そうした単純な対立構造のみが描かれているのではない。もちろん資本主義社会や資本主義家への批判は、充分伝わってくる。だがそれだけではなく不当な立場に追いやられている筈の労働者の姿を正確にとらえ、描写している。本当は資本家と対峙していかなくてはならない労働者が、現実にはどれ程の意識を持ち得ていたのか、どれ程自分達の生活や社会のことを考えていたのかなど、明確に写し出されている。労働者の内実が見事に描き出され、「プロレタリア文学」というものが単純な対立構造のみを書いているだけではないという事が良く分かった。そうした意味でも私はこの作品によって新しい認識を得る事ができ、より広い視野で文学をとらえる事が可能になった。そして何より主人公石井の存在が、それまで読んできた作品よりも『坑夫』を魅力的に感じさせた。であるから「プロレタリア文学」というだけで敬遠されてしまう事は、少々疑問を感じる。読まれる必然性がないのであれば、なぜ「プロレタリア文学初期の傑作」といわれている『坑夫』がここまで私を感動させ、震撼させるのか。そうさせる為には時代を超える、ある種の不変性がなくてはならない。また私は所謂「労働問題」というものが、現代においても完全に解決されたとは思っていない。もし解決されているのならば、「資本家」や「労働者」などという言葉がなぜ現時点においても使われているのだろう。「労働者」の条件がどれ程変化したにせよ、「資本主義

社会」は終わっていない。「資本主義社会」が崩壊していない以上、それに伴う弊害も終わりを告げる事はないだろう。そうした意味も含めて私は是非この『坑夫』を解剖してみたいと思った。この作品の魅力は、何処にあるのか。『坑夫』を通して作者が訴えたかった事は一体何だったのか。そして何よりも現代と照らし合わせて、『坑夫』に於ける不変性を探っていきたい。

この作品を語る上で、主人公石井の存在は決して除外する事は出来ない。彼の行動・考え方などが、すべて作品の骨となり肉となっているからである。一見粗野で乱暴者である彼だが、石井の心の中にはとても複雑な思いが渦巻いている。彼がそうした思いを持ち続けながら生き抜く姿には、大変魅力がある。ここではまず石井金次像に迫り、その魅力を追究してみたい。

石井の中に渦巻いている複雑な思いは、長い年月をかけて彼の心に蓄積されたものである。『坑夫』には主に池井鉱山に於ける石井の生活が描かれているが、石井はここへ辿り着くまでに多くの体験をした。それらの経験は、石井の生き方に大きな影響を与え、彼の中にある確固としたものを築かせていったのである。それは大きく分けて二つある。一つは、父親の死から旧坑での生活を経て知った事である。自分は人間として全く恥ずかしくない存在であるのに、坑夫というだけで馬鹿にされるという事。さらに自分の命を削るようにして働いているのに、その労働力を一方的に搾取されてしまうという事である。石井はこの点に関して大きな疑問を抱いた。人間とは一体何であるのか。真の人間の生活とはどういったものであるのか。少なくともこうした不平等な生活が、坑夫というだけで人間扱いされないような世界が、本当の人間社会とは思えない。石井はこうした自覚をそれまでの経験で得たようだ。石井はその自覚を埋もれさせるような事は絶対になかった。彼は最後までこうした思いを持ち続け、あくまで反発していくのである。第二に、野州の暴動からその後の生活において、石井は新たな認識を得ている。それは生活を圧迫され人間らしい暮らしをしていない同じ立場にある人々が、仲間を裏切るという事実にぶつかってからである。彼等はほんの少し生活が良くなると、後は警察などの力を恐れて後退してしまう。だが石井はそれまでの経験から、それだけでは真の人間らしい生活を獲得していない事を良く知っている。熱血的で真っ直ぐな石井にとって、そうした中途半端な行動は許せなかった。しかも彼等は、同志である石井を疎ましく扱うのである。石井がここで感じた事は、本当は人間らしい生活をもっと要求していい筈の労働者達が、そうした自覚が足りず行動があまりにも曖昧である、という事ではないだろうか。それは石井の中で、大きな怒りとなっていく。これらの事が石井の中には存在し、そして消えずにいる。特に仲間達に対する怒りは根強い。人間らしい生き方、真の人間の生活とは何かを自覚し探求し始めた彼にとってみれば、仲間のいい加減な態度は癪に障って仕方なかったのだろう。こうした怒りや腹立たしさは、その後の石井の生活に於いても明確に表されてくるのである。

池井鉱山に於ける石井は、坑夫達から「氣狂」扱いされるほど恐れられ、避けられている。坑夫達は石井の暴力的な行動の意味が全く理解出来なかった。確かに石井の中には彼自身が言っている通り、どうにも止められない荒々しい性質があり激しい怒りがある。だがそうした荒々しさや怒りは、人を選ばず無闇に表れていない。鉱主や鉱石係に不満を持っていながら、それを口にするだけで一切行動

しない人間、行動を起こしても少し生活が良くなっただけで、手の裏を返したように仲間を疎んじる人間、仲間に偉そうな事を言いながら、影で事務員に媚びる人間、人の収入を頼りにしながら威張って生きている人間等に石井の怒りはぶつけられていくのである。つまり石井は、曖昧で怠惰で人の力を借りて楽をしようとする人間を許す事ができない。それほど石井は無垢で純粋な魂を持っているのだろう。彼の真っ直で人間として恥ずかしくないように生きようとする心が、周囲のいい加減な生き方を見逃す事ができないのだ。石井のこうした姿勢は生涯を通して貫かれているものであり、感心させられてしまう。例え暴力的な行動であろうとも、その背景には石井の不屈の精神が宿っているように思えてならない。

しかし石井の苦悩は深まる一方であった。理解者も得られず、恋したと思った女にも裏切られ、石井は孤独感をも深めていくのだった。そんな時いつも真面目に働いていた宮澤という男が、事故で無残な死に方をする。石井の頭からは暗く重い死の影が離れなくなり益々苦しむのである。しかし、石井の抱えている思いは、決して間違ってはいない。人間は本来平等に生きる権利を持っている。だがそれは現実には実行されていない。石井が経験してきたように、坑夫は社会からまるで獣のように扱われ爪弾されている。そんな状況下にあって、石井は人一倍自分の生というものを考えていた。人の生命には限りがあるのだ。その限りある生命の中でなぜ坑夫に生まれたというだけで苦しみを背負い、人間以下の生活を送らなければならないのかということを、石井は常に考えている。石井の要求は当然のものである。しかしその人間として当たり前の要求はなかなか果たされない。原因の一つとして、坑夫達が各自そうした要求をきちんと持つ事ができず諦めたかのように暮らしている事がある。人間らしく自由に生きたいという強い願いとそれがどんどん不可能になっていく状況は、彼を苦しめた事だろう。死は確実に迫ってくるのに、なぜ人間らしい楽しい生活を手に入れられないのか。石井という男は坑夫達の誰よりもこうした思いが強く、そして簡単に忘れたり諦めたりしなかったからこそ悩み続けたのだろう。それほど彼は純粋で無垢な魂を持ち、真っ直ぐに生きようとしたのだ。そしてそれは、石井の最大の魅力となっている。

石井の暴力的な行為は、そうした彼の深い悩みが体現化したものではないだろうか。自分の力では制止できない深い苦悩だったからこそ、そして周囲の坑夫達があまりにも怠惰で曖昧だったからこそ、彼は外へ向かって発散するよりなかったのだろう。勿論石井の行動は、坑夫達の自覚を促す為とも考えられる。しかしどちらかというと前者の要素の方が強いように思う。なぜなら石井の中には坑夫達を纏め上げて一つの団体にし、全員で社会へ訴えていくような先導者的な要素はないからである。彼は自らの経験を通し自分が人間として満足な生活をしていない事、社会の不平等に気付きそれを自覚した。限界まで圧迫された生活の中で人間として当然の要求を果たしたいと願い、その為に懸命に生きようとした。だから怠慢で自分の生命の事をどれ程大事に考えているか分からない坑夫達の中で、そうした意識を持った先駆者的な要素はあると思う。石井はそうした自覚や意識を具体的に表現し、坑夫達や社会へ訴えていく方法論を持ち得なかった。それは彼の性質的なものによるところが大きいのだろうが、石井は暴力によってしか自分の内部を表現できなかったようだ。しかし石井にそれ以外何ができただろう。その他の楽し

みは、殆ど奪われてしまっていたのである。最も石井の暴力は他の人々には只の「氣狂」としか写らなかった。それは、石井にとって最大の不幸であった。

残念な事に、石井は坑夫達によって惨殺されてしまう。彼等は誰一人として石井の心を知ろうとしなかった。石井の暴力的な行動が彼の深い苦悩が表現されたものであることなど、全く理解できなかった。彼等が石井を惨殺する描写を読む度に、石井が言った『坑夫だって人間だ。』という言葉を思いだす。石井は人間として生きようとした。石井に暴力的な面があったとしても、人間らしく生きたいと願った彼に一体何の罪があるのだろう。石井の死は、とても残念に思えてならない。

だが、例え結末が悲劇的であろうとも、石井という存在がなければこの作品は全く意味のないものとなってしまっただろう。ここで、石井像について纏めてみたいと思う。石井は知識や教養といったものには縁のない男だった。しかし自分が生活し様々な経験を積み重ねていく中で、人間として生きる上で最も重要な事を学び自覚している。それは、『坑夫だって人間だ。』という彼の言葉に最も良く象徴されている。立派に生活を営み社会の為に働いている人間が、なぜ豚小屋のような所に住み、汚れた着物や布団しか与えられず、何の楽しみもなく暮らしているのか。石井にとってみれば、この不当で不平等な世の中は耐えられないものだった。ましてや世間の人々や資本家がつくり出している矛盾した社会構造――経済力の強い一部の人間だけが利益を独占し、社会の為に真面目に働いている人間は労働力を搾取されるばかりで、人間として最低限の生活さえ保障されないという構造――を、他の坑夫達は何となく分かっている筈なのに、一向に改善を求める様子を見せない。このような状態を目の当たりにすれば、石井の苦しみは増加する一方であった。石井が望んでいるのは、彼の言葉で言うと「酒」と「女」、「放浪の自由」ということになる。石井は鉱主が美しい女や旨い酒に親しめるのならば、自分にもそうする権利があると思っている。勿論それは人の権利や利益を奪ってまで達成されるものではない。石井のこうした考え方にはまだまだ未熟なところがある。しかし自分も他の人間と同じ権利を持っているのだという石井の考え方は、全ての人間が平等で幸福の権利を持つという、人間社会の一番の理想の根底に繋がっていくものではないだろうか。石井が望んでいることは、人間として生きる上で決して度を外れたものではない。人間として当然の権利である。しかし周囲の状況がなかなかそれを許さなかった。だからこそ石井は人間らしく生きたいという願いを一層募らせていくのであり、そうした彼の中にある願いは常に心を責めていたのだろう。石井はその性格からいって、心にあるものを無理矢理抑えておく事は出来ない。寧ろ行動し外へ外へと爆発させる人物である。石井の行動を現時点から見れば間違っていたように感じるが、石井を取り囲んでいた状況を考えると一概にそうとも言えない。それにしても石井は強い人間だった。自分の信念を決して曲げず、自分が納得出来ないものとは絶対に迎合しない。自分自身を深く見つめ自己を確立し、何より矛盾に満ちた世界を否と感じ拒否し続けるのである。石井には、どんな状況に追い込まれても周囲からの軽蔑や嘲笑に屈しない絶対的な強さがあった。それが石井の最大の魅力であり、作品の魅力ともなっている。宮嶋が自作について語った時、石井のことを次のように述べている。

私は正直に妥協する所なく、この人生に自己を生かし行く者の生活を書きたかった。そしてよしその最後が悲劇にまで導かれようとも、それは彼自身にとつては寧ろ、悲劇でなく、光輝ある愉快なる結末である、と云ふ信念を持ってゐた。

（宮嶋資夫著作集第六巻　「歓喜と苦痛と――自分の小説について――」　三三一頁）

作者が述べているように、石井は最期まで周囲に屈せず抵抗をやめなかった。それは悲劇に終わったが石井は間違っていない。石井の死は悲しいものだが、彼の純粋な姿が最後まで貫かれることによって、「光輝ある愉快なる」結末であったように思う。

さて、現在労働状況は著しく変化した。だからこの作品に描かれている当時の労働者達の状況は、絵空事のようである。だが『坑夫』に描かれていることは、全てが虚構ではない。少なくとも作者は自分の労働経験を通して、この小説を作り上げている。この作品はまず当時の労働者の苦しめられていた現実を描いたものとして、評価される。また作者はもう一歩踏み込んで、労働者の姿をとらえている。前述したように労働者達が虐げられた状況にあっても、各々しっかりと自覚を持てず、曖昧に日々を過ごしていたということである。坑夫の中には己の利益を第一に考える人間もいた。事務員に世辞を言う狡い人間もいた。周囲に迎合してしまい誰かが何か言い出さなければ動けず、損得を第一に考えるような坑夫達の姿がよく描かれている。それもやはり作者の鋭い観察によるもので、作品として十分評価できる部分だろう。また作品の表現の点についても、私は評価したい。特に自然の描写は群を抜いて素晴らしい。作品の冒頭を読んだ時には、本当にこれが「プロレタリア文学」と呼ばれているものだろうかと思った。それだけ「プロレタリア文学」に対する偏見が強かった事もあるが、しかし自然描写の細かさ美しさは大変優れている。そうした自然描写の美しさの反面に坑夫達の悲惨な状況が描かれているので、その差の大きさが当時の坑夫達の生活をより分かりやすく、読者に訴えるものをより強くしているのだろう。しかし作品として、当時の状況が細かく正確に記録出来ていたり、描写が優れているというだけでは良いものとはなり得ない。作品の根底にしっかりとしたテーマがなければ人の心を打たないし、時代を越えて評価される事もないのである。この作品で最も重要なのは石井の存在である。「正直に妥協する所なく、この人生に自己を生かし行く者」としての石井の姿がなければ、この作品は何の輝きも持たない。石井が人間として必死に生きようとし矛盾だらけの社会に反発し、自己を曲げずに生きようとするからこそ、私は石井に様々な事を教えられ胸を打たれた。そして石井の姿そのものに、この作品のテーマがあるような気がした。自分が社会の中でどう生きていくのか、どう生きればいいのかという事は今も変わらぬテーゼである。石井の生き方は、そのテーゼに一つの解答を見せた。彼が社会で生きる上で自分を苦しめるあらゆるものに反抗していく姿は、私に人間の強さと可能性を教えてくれた。こうした石井の姿があるからこそこの作品は人の心を打ち、時代を越えて評価される不変性を持った、素晴らしいものとなっている。

さて今まで作品を中心に論じてきたが、周囲の評価は一体どのようなものであったかをみていきたい。

『坑夫』は一九一六年一月五日に刊行された。『坑夫』はもともと『坑夫の死』という短い小説であったが、窪田空穂に勧められも

との五倍近い長さに書き改めたそうである。その『坑夫』の原稿を一番最初に読んだのは宮地嘉六らしい。宮地嘉六はその時の感想を次のように述べている。

それまでもお互いに自作を見せあったが、「坑夫」を読みながら僕は嘆賞した。もうおれは完全に追い越されたという気だったがいいものはいいと感心する外はないのだった。

（宮地嘉六著作集第六巻　「宮島の処女作　としての『坑夫』」二一二頁）

そしていよいよ発刊の運びとなる。発刊の際大杉栄と堺利彦の序文が添えられ、『坑夫』は好調なスタートをきった。しかし同年一月九日に発売禁止の処分を受け、紙型まで押収されてしまった。この発売禁止に対して、宮嶋資夫は次のように述べている。

私は全く失望した。警視庁の丸山鶴吉、警保局の後藤文雄などゝ云ふ人とも掛け合つたが、どこが悪いと言ふわけでもないが全体が反逆的でいけないと言ふのだ。発禁の理由は風俗壊乱である事を以て私は遺憾として、その個所を削る事を以て紙型を返してくれ、と云つたが押収の条文はあつても返附する事は規定にないから返せないの云ふのである。掛け合つてゐる中に気が腐つた。

（宮嶋資夫著作集第六巻　「歓喜と苦痛と――自分の小説について――」三三二頁）

さてこのような憂き目をみた作品であったが、決して評価されなかったわけではない。当時でも正当な評価を受けている。ここでは当時の評価について、私ができる限り調べた結果を纏めてみたいと思う。

『坑夫』の発売禁止についていち早く反応を示したのが、新聞である。一九一六年一月一二日、「讀賣新聞」「萬朝報」「都新聞」「時事新報」において、発売禁止の旨が告げられている。いずれの新聞においても理由は「風俗壊乱」としか書かれておらず、それ以上の詳しい理由は分からない。宮嶋資夫もいっているように、当局側は明確な理由を示さなかったらしい。しかし「風俗壊乱」というだけで、紙型まで押収されるのだろうか。私には甚だ疑問に思えてならない。『坑夫』の中には非常に色濃い資本主義社会や資本家に対する批判があり、労働者の自覚を促すような部分が多い。また『坑夫』の広告には、

横暴にして黠なる資本家に對する憎悪反抗。盧僞怯懦にして、權力に媚び、友を賣つて恬然たる、無恥無氣力の勞働者に對する輕悔反感。

矛盾せる社會組織に激したる勞働者の、徹底せる本能の叫びを聞かんと欲する人、僅少の賃金に幾多の人類が生命を賭して、貴重なる生産に從事しつゝある坑山生活の凄愴暗黒の状を知らんと欲する人は此の書を讀まざる可からず。

（「新社会」一九一六年一月号　『坑夫』の広告より）

のように書かれており、社会運動家である大杉栄と堺利彦が序文を書いているせいもあって、目を付けられたのではないだろうか。この事はまさに、日本の思想統制の一面を示しているだろう。しかし発売禁止の悲しい知らせばかりではなく、きちんと評論を掲載している新聞もあった。「東京日日新聞」「東京朝日新聞」「世界新聞」がそうである。その中で「東京日日新聞」は、唯一発売禁止前に評論を載せている。

反逆精神に充ちた一青年が放浪十數年の間に獲得した事實の一である、そして此事實はこれら生活に觸れない人々の理解には來ぬ

事柄かも知れないが、作者は藝術的にも殆ど遺憾なく成功してゐる、そして藝術を通じて我等に此恐しい事實に面させてゐる、成功せる特殊の作品として大正五年初頭に於て我等に何事かを暗示してゐる作品である。（一九一六年一月八日付）

「東京朝日新聞」は発売禁止後に

従来ゴルキイを模倣して日本の文壇でも労働者の世界を題材にしたものがあつた併しそれ等には力と云ふものが無かつた尊敬す可き眞寛性を欠いて居た宮島資夫氏の「坑夫」には何處にか力を認めることが出來る是は作者の寛生活が中心に出ていゐるからである面白い作だ得難い作だ欲を云へば今少し人間の靈性の奥底へ入りこみたかつた（一九一六年一月一四付）

という評論を掲載している。「世界新聞」は一九一六年一月一四日に評論を掲載しているが、あまりに長いので内容を纏めておく。まず「陰惨な絶望的な、氣荒な、享樂的な坑夫生活や其氣分が、或る程度鮮やかさを以て表現されて居る點に於て成功した作である。」としている。しかし石井については「平凡な弱い性分の」男とし、また「繊細な筆」で描き出された自然の光景が、石井との気分との間に「襯和性がなくチグハグになつて居る」と、作品の欠点として挙げている。だが「全體として云へば特色ある作品として我國文壇に異彩を放つべき作である」として終わっていた。これらの評論に対し私の意見を言わせてもらうとすれば、「東京日日新聞」「東京朝日新聞」については文句はないが、「世界新聞」に於ける石井の評価と、自然描写を欠点とする事には納得がいかない。作品解釈で分析したように石井は決して弱い男ではないし、自然描写は絶品で主人公の気分と相入れないものではない。しかし少なくとも『坑夫』が評価され、世に紹介されたのは良い事だろう。特に発売禁止前に逸早く評論を掲載した「東京日日新聞」を発見したときは、なぜだか我が事の様に喜ばしい思いがあった。

以上のように、簡単ではあるが発刊直後に於ける評価について纏めてみた。これらを見て分かった事は、『坑夫』が決して軽く扱われていなかったという事である。評論の中にもあったように、日本の文壇に波紋を投げ掛けたようだ。そして当時の評価が示す通り、『坑夫』は現代にも生き残り、「初期プロレタリア文学の傑作」として、研究が続けられている。宮嶋資夫は発売禁止に相当のショックを受けたようだったが、『坑夫』は歴史の波に埋もれることなく蘇った。それは当時の評価に裏付けされて居るように、『坑夫』が素晴らしい作品である事に間違いないからである。

そして私は、『坑夫』という作品を通して様々な事を考えさせられた。

第一に資本主義社会に於ける弊害についてである。資本主義はある特定の者、資本を持つ者のみが利益を独占出来、資本を持たない多くの人々は労働力を搾取されながら虐げられているという、不平等な状況を生み出した。資本家達は権力家と結び付き、その力を拡大すると共に労働者達を圧迫し、彼等の生活と権利を奪っていくのである。その結果労働者達は、自分の生活や人生に対して思索する余裕を失い、無気力化していく。『坑夫』はそうした状況を真正面からとらえ、批判している。それにしても恐ろしいのは、人間の私利私欲であろう。人の生存を脅かしてまでも自分が楽をしたいという考え方は、資本主義の発達と共に大きくなっていくような気がする。そしてこの考え方は資本家だけでなく、労働者の中にもあるの

だ。それを生みだしたのはやはり資本主義の構造であり、そして大きな弊害であると感じる。

第二に、石井の姿を通して、真の人間の生き方について考えさせられた。このことは本論に於いて詳しく述べているつもりなので重複は避けるが、自己に忠実に生き、周囲に最期まで反抗し続けた石井の姿には、教えられる事が多かった。本当に石井の強さには並々ならぬものがあると思う。私がこの作品を初めて読んだ時には、まだ労働経験がなかった。だから石井の苦しみも、実感を伴っては理解していなかった。社会へ出た今、石井の苦しみがようやく本当に理解できた気がする。そして不満を持つ社会に真正面からぶつかっていき、反抗し続け、迎合しない石井の強さに今は心から感服する。この石井の姿がなかったならば、『坑夫』はここまで傑作とは成り得なかっただろう。

第三には、やはり現代について考えが向かった。最初に述べたように、資本主義社会が続いている限り、それがもたらす弊害も続いているだろう。それが現代に於いてあまり表面化してこないのは、皆がそれほど過不足なく生活できるからである。しかし果たしてそうなのか。私には、現在の社会が真に平等であるようには見えない。相変わらず利益は特定の者に集中し、人間の利己的な考え方をますます増長させるような社会が、形成されているのではないか。金さえあれば何でも出来るといった考え方は、今もって横行しているのである。しかし我々は、「ある程度の物質」と「快楽」という「アメ」を与えられ、資本主義の弊害の事など忘れて生活している。今ある生活と幸福が真実のものと思い込み、それが紛い物であることを気が付かないかのように、平気で暮らしているのである。しかし私はこの『坑夫』を通して、そして石井の生き方を通して、この社会で生きる上で真に人間らしい生き方とは何かを考えさせられた。石井の無意味ともいえる暴力的な行動には、確かに問題があった。しかし暴動後、生活がほんの少し良くなり、他の坑夫達がそれに誤魔化されてしまったかのようにおとなしくなった後でも、石井はそれを真実のものではないと見抜いていた。それができたのは、石井がなにものにも左右されず、なにものにも曇らされる事のない、純粋な魂を持ち得たためだろう。私達は日常の忙しさや物質的なものに惑わされ、本来最も大切にしなければならない魂の声を無視してはいないだろうか。もしそうであるならば、我々は一体何のために生まれ、そしてなんのために生きていくのだろう。石井にとって、自らの心の命ずるままに生きられないということは、最大の屈辱であった。何をおいても、例え「氣狂」扱いされようとも、真の「人間」として生きることが彼にとって最も重要であった。それは本来、全ての人間が持ち続けなければならないものではないのか。私はそんなことを、この『坑夫』によって考えさせられた。しかしそれは、並大抵のことでは出来ない。人間の魂は、「真の生活とは何か」といった根源的な問題よりも、やはり目の前にある物事にとらわれてしまう。それがいけないというわけではない。石井のように常に闘い続けるには、並々ならぬ精神力と強さが必要だからだ。ただ、いつまでもとらわれていてはいけないのだ。必ずいつかは「正直に妥協する所なく」「人生に自己を生かし」ていけるような生活を、求めていかなくてはならない。そうでなければ、私達は全く成長がない生き物となってしまう。そして真の生活や人間らしい生き方は、何十年何百年かかっても、手に入れることは出来ない。そう考える

と、短い人生の間にその事に気付き、純粋にそれを追い続けた石井の姿は、やはり素晴らしいと思うのだ。さらにその精神力と強さに、思わず感嘆の声を挙げずにはいられない。私は、いつも自分の心の中にそんな石井の姿を留めておきたいと思っている。周囲の雑事にとらわれているばかりの人生でなく、人間本来の生き方を求めることを忘れずにいたい。まだそのような生き方を手に入れてはいないが、石井のような純粋な魂を持ち続けたいと思う。そうした信念を持たせてくれたのが『坑夫』であり、石井の劇的な激しい生き方である。限りある人生の中で、自分のすべき事は何なのか。それを深く考えさせてくれる作品であった。そして、『坑夫』に描かれていることは、もう終わってしまったことではないと感じた。これから自分達が考えていかなくてはならない最大のテーマが、この中にある。だからこそこの作品は、今も色褪せることなく輝いているのだろう。もし私が「プロレタリア文学」というだけでこの作品を避けていたら、私はこれ程深く様々な事を考えたりしなかった。そうした意味で『坑夫』は、私にとって忘れられない重要な作品となった。この作品に出会えた事を、とても感謝している。

参考文献
宮嶋資夫『坑夫』（復刻版）　不二出版
『宮嶋資夫著作集』全七巻　慶友社
『宮地嘉六著作集』第六巻　慶友社

（なかむら　まゆみ・一九九三年・一部卒）

〈本誌第48号の反響〉その二

「教育実習を体験して」（伊藤延子さん）

中学の最初の授業で、最初に指名されて読んだ時「よく読めました」という先生のほめ言葉。もう一つ、自分の詩を黒板いっぱいに先生に書いてもらった、その思い出。これがずっと伊藤さんを支え続けて来て、ついに教師への道を歩ませることとなる。たった一つの賛美の言葉が時に一人の一生を変えてしまうことがある。

教える側にまわった教育実習の場で伊藤さんは今度は生徒との間に幸福な出逢いを見出そうとしておられる。自分の希望を追求して行く伊藤さんの真摯な姿勢に感銘を覚えた。ぜひ御自身の夢を実現させていただきたい。

奥山昌美（四H・中野ゼミ）